

協働し、組織的にすすめる校内研修

～カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して～

柳川市立矢ヶ部小学校
教諭 野間口 美奈子

こんな手立てによって…

カリキュラムマネジメントのサイクルを「連続的・継続的・発展的」に循環させながら、校内研修の各段階において、教務としての働きかけを行った。

こんな成果があった！

教職員の一人ひとりが研修に対する参画意識が高まったことが授業力向上に結びつき、協働し、組織的に校内研修をすすめることができた。

1 考えた

「生きる力」が求められ、グローバル化が進む中、教職員の授業力向上が図られなければならないことは必要不可欠な要素である。また、福岡県教育施策実施計画の《施策16》や教育力向上福岡県民運動におけるアクションプラン《提案4》にも、教職員の資質・能力の向上や学校の組織力の必要性が示されている。つまり、教職員の授業力向上が効果的に図られるようにするためには、校内研修が組織的・継続的にすすめられることが大切であると考えた。そこで、校長・教頭の指導のもと、重点目標達成のために、計画（P）→実施（D）→評価（C）→改善（A）のサイクルを「連続的・継続的・発展的」に循環させながら、研修に関する教務運営の有効性を探ることにした。教職員が協働し、組織的に進める校内研修を目指して、本主題を設定した。

2 やって見た

研究の実際では、次のようなPDC Aサイクルで、教務運営の有効性を明らかにしていった。

- ①【課題の共有化】段階における働きかけ（CA）
- ②【計画の共有化】段階における働きかけ（P）
- ③【実施】段階における働きかけ（D）
 - ア 授業研究の場合
 - イ プチ授業研究（日常の授業）の場合
- ④【成果と課題の共有化】段階における働きかけ（CA）

3 成果があった！

研究を進めてきた結果、次のような成果があった。

- ① 【課題の共有化】（CA）からスタートし、【計画の共有化】（P）→【実施】（D）→【成果と課題の共有化】（CA）の各段階において、教務主任としての働きかけを行ったことで、マネジメントサイクルが循環し、めざす教職員の姿が見られるようになった。
- ② 担任の授業力向上とともに、児童の学力の伸びが見られた。

協働し、組織的にすすめる校内研修

～カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して～

1	主題設定の理由	3
	(1) 今日の教育的課題から	3
	(2) 本校の教育課題・経営課題と教職員構成から	3
	(3) 教務運営の立場から	4
2	主題の意味	4
	(1) 協働してすすめる校内研修とは	4
	(2) 組織的にすすめる校内研修とは	4
	(3) カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営とは	5
3	研究の目標	5
4	研究の構想	6
5	研究の実際	7
	(1) 【課題の共有化】段階における働きかけ	7
	(2) 【計画の共有化】段階における働きかけ	9
	(3) 【実施】段階における働きかけ	10
	(4) 【成果と課題の共有化】段階における働きかけ	16
	(5) 全体考察	17
6	成果と課題	20
	(1) 研究の成果	20
	(2) 研究の課題	20
	<参考文献>	20

協働し、組織的にすすめる校内研修

カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して

柳川市立矢ヶ部小学校
教諭 野間口 美奈子

1 主題設定の理由

(1) 今日の教育的課題から

「生きる力」が求められ、グローバル化が進む中、「知識基盤社会」を担う子どもたちの課題の視点として、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」などが挙げられている。それらの課題を解決していくためにも、教職員の授業力向上が図られなければならないことは必要不可欠な要素である。

また、福岡県教育施策実施計画の《施策16》(信頼される教職員の育成)には、教員としての資質・能力の向上や指導技術の継承の必要性が述べられている。

さらに、教育力向上福岡県民運動におけるアクションプラン《提案4》には、「本質的な課題を解決する必要性を一人一人の教師が理解し、自らの力量を高め、学校の組織力を強化し、共通した指導方針のもとに、学校全体で子どもを育てていくことが大切である。」と述べられている。

つまり、教職員の授業力向上が効果的に図られるようにするためには、全員が課題を分析・把握した上で、学習指導の目標・内容・方法を共有化して計画し(P)、それぞれが実践し(D)、それを評価し(C)、改善策を見出していくこと(A)が組織的・継続的に図られることが大切であると考えた。このことは、確かな学力を身に付けた子どもを育てていく上でも意義深い。

以上のように、カリキュラムマネジメントの手法を取り入れることにより、具体的方策を見出し、教職員が協働し、組織的に進める校内研修を目指して、本研究主題を設定した。

(2) 本校の教育課題・経営課題と教職員構成から

平成25年度の本校の教育課題・経営課題は、次のようなものであった。

【教育課題】…①論理的思考力・表現力の育成

②規範意識及びよさを認め合う態度や思いやりの心の育成

【経営課題】…①授業力と学級経営力の向上

②“チーム矢ヶ部”によるカリキュラムマネジメントの推進

この背景には、「他者の話をしっかり聴き、自分の考えと比べたり重ねたりしながら、論理的に整理し、表現することが不十分である。」という子どもの実態と、「教師主導型授業から脱却できず、考えを深める手立てが不十分である。」という教師の実態があった。

また、数値的根拠として、全国学力・学習状況調査や標準学力調査の結果から、全国平均

を上回っている学年もあれば、下回っている学年もあり、学年間の学力の状況に大きな差が見られることも挙げられる。このことは、児童の実態や家庭の教育力はもとより、教師の指導力の違いと指導方法のばらつきが原因の一つであると考えた。

本校は、各学年単学級6クラスに加え特別支援学級1クラスの全7学級の小規模校である。教職員の異動によって、担任が平成24年度は4人、平成25年度は3人、本年度は3人赴任してきた。ほぼ、半分の教職員が毎年入れ替わっているという現状である。そんな中、全教職員が子どもの実態を的確に把握し、課題を共有し合って一貫した教育活動を行い、成果を上げることは容易なことではない。また、それができたとしても、その組織文化が継承されていかなければ、学校教育目標は達成しがたい。

そこで、平成24年度に校内研修担当として行ってきた校内研修のすすめ方を振り返り、平成25年度は教務主任として、協働し、組織的に研修をすすめていく方途を探ることは、研修の日常化を図り、教育効果を発揮する上でも意義深いと考えた。

(3) 教務運営の立場から

平成25年度は、新任教務主任・第5学年の担任として職務を遂行することになった。教務主任としての立場から組織的に校内研究をすすめていく上で、自分自身の実践を通して内側からの発信ができる機会を与えられたことは、これまでの実践の評価・改善策をもとに、チーム分析と個人分析ができ、他の教職員と協働実践ができるよい機会であると考えた。

また、平成25年度は、柳川市の学校教育研究指定（学力向上）の3年目を迎え、研究発表会の年でもあった。発表会と聞くと、研究のまとめであり、ゴールのようであるが、校長・教頭をはじめ、教職員は、「本校の研究のまとめではなく、研究の過程や方法を見ていただく」という姿勢で発表会に臨んだ。つまり、「これまでに積み上げてきた研究を継続し、他にも広げていくことが本当の研究」という立場で、教職員の授業力向上への意識改革を図る主題研究の運営に絞り、本研究主題を設定した。

2 主題の意味

(1) 協働してすすめる校内研修とは

学校の教育目標達成のために、教職員全員が参画意識をもち、課題を解決するための方途を探り、互いの資質・能力の向上に向けて学び合う研修のことである。

目指す教職員の姿としては、次のような「わかる授業づくり」を目指す姿が考えられる。

- ・ 児童の実態をもとに、教材研究や支援の在り方を研究する姿
- ・ 日常的に課題を意識した研究・授業をする姿
- ・ 他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿
- ・ 自分の研究成果を他の教職員に広げていこうとする姿

(2) 組織的にすすめる校内研修とは

学校の教育目標達成のために、それぞれのキャリアステージに応じた参画の仕方や共通実践を通じた指導を連続的・継続的・発展的（※）に行っていく組織の力を生かした研修のことである。（※）参考文献「実践・カリキュラムマネジメントP12より」

目指す教職員の姿としては、次のような「他の教職員と連携」していく姿が考えられる。

- ・ それぞれの実践をもとに研究主題をより具体化していこうとする姿（連続）

- ・ 研究の内容や成果を価値づけ、継承していこうとする姿（継続）
- ・ 研究の有効性を分析したり、課題に対する改善を加えていこうとする姿（発展）

（3）カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通してとは

校長・教頭の指導のもと、研究主任と連携を図りながら、研究の成果を上げるために、計画（P）→実施（D）→評価（C）→改善（A）のサイクルを「連続的・継続的・発展的」に循環させながら、その具体的方策を立て、研修を運営することである。

平成24年度・25年度の本校の校内研修の講師であった田村知子氏（現 岐阜大学 教育学部・教育学研究科・准教授、平成25年度までは中村学園大学 准教授）は、「困難といわれる評価・改善（CA）段階こそがカリキュラムマネジメントの鍵である」と述べている。カリキュラムマネジメントの手法を取り入れ、校内研修のPDCAサイクルにおいても評価・改善からスタートし、計画を立てて実行する（CA→PD）具体的方策を立てることで、校内研修の協働化・組織化が図られると考えた。具体的方策としては、次のような段階での働きかけが考えられる。

① 【課題の共有化】段階における働きかけ（CA）

- ・ 前年度の重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習満足度アンケートの結果分析、各学力調査や市販テストの結果分析を通して、研究の方向性をつかみ、課題を明確にする。

② 【計画の共有化】段階における働きかけ（P）

- ・ 校長、教頭の指導のもと、研究主任と連携して組織づくりを行い、研修の目標、内容、方法について話し合ったり、年間計画を立てたりする。

③ 【実施】段階における働きかけ（D）

ア 授業研究の場合

- ・ 教材研究や授業づくりに役立つ資料の提供や事前授業の設定（ア-P）
- ・ 授業研究当日の役割分担（ア-D）
- ・ ワークショップ型授業整理会の運営（ア-C）
- ・ リレー研修だよりの役割分担（ア-A）

イ プチ授業研究（日常の授業）の場合

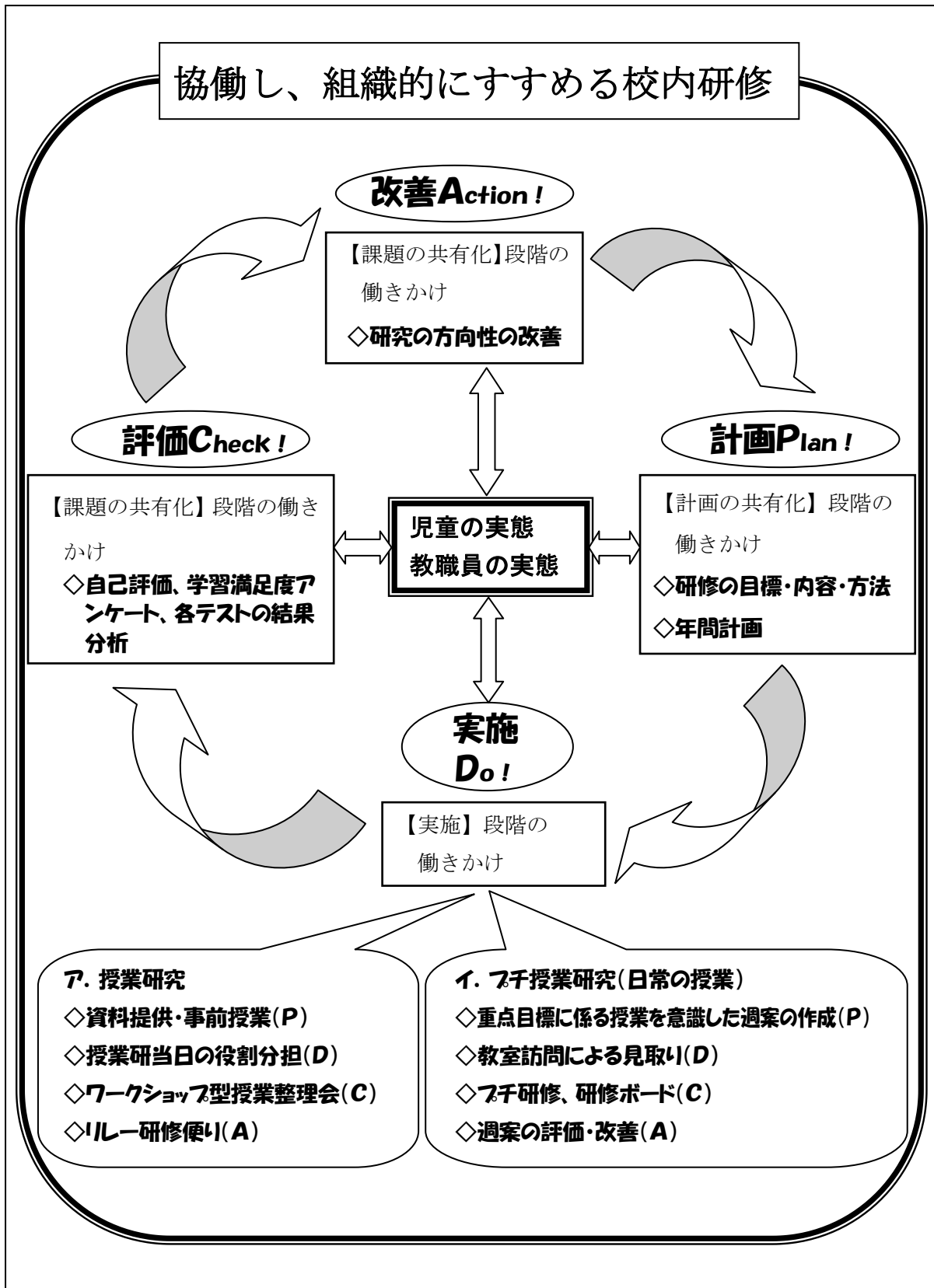
- ・ 重点目標に係る授業づくりを意識した週案の作成（イ-P）
- ・ 教室訪問による見取り（イ-D）
- ・ プチ研修や研修ボードによる授業の見える化と週案への評価・改善の記入（イ-CA）

④ 【成果と課題の共有化】段階における働きかけ（CA）

- ・ 学期毎に、重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習アンケートの結果分析、各学力調査や市販テストの結果分析を行い、研究の方向性を見直し、評価・改善していく。

3 研究の目標

協働し、組織的にすすめる校内研修を運営していくために、マネジメントの手法を取り入れた教務運営の在り方を究明していく。



↑資料① 研究構想図 (校内研修のマネジメントサイクル)

5 研究の実際

(1) 【課題の共有化】段階における働きかけ

- ① 平成24年度の課題を受けて、平成25年度は、校長より重点目標「よく聴き、しっかり考える子どもの育成」が示された。また、平成24年度まで在籍していた主幹教諭が作成した「重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価」の結果分析から、児童への学習指導の在り方の課題は明確であった。そこで、教職員自身の研修に対する評価である「カリマネの機能を活かした職務・校内研修への取り組み」の評価欄を設け（資料②参照）マネジメントサイクルを意識した自己評価を行うことにした。

平成25年度 重点目標(学力面)に対する達成状況 自己評価

(重点目標) よく聴き、しっかり考える子どもの育成

4…90%以上達成 3…70~80%程度 2…60~70%程度 1…50%未満
 ◎①と②については、児童の姿(できるようになっているか)で評価してください。

評価の観点(子どもの姿や教師の姿勢)	1学期	2学期	3学期
① 学習の構えの指導 時間を守り、教科書やノートなどの学習の準備をして授業の開始を待っている。 授業始めと終わりのあいさつがきちんとできている。 ・教師に注目して ・背筋の伸びた姿勢で 机の上や身の回りをきちんと整理し、机上のルールを守って学習している。 指名されたら、はっきりとした声で返事をして立つことができる。			
② 「よく聴き、しっかり考える」の育成 自分の考えをつくり、絵図・式・言葉などを使って、分かりやすくノートに考えを書くことができる。 友達の話を、目と耳、心で聴くことができる。 ・話し手の方を見て ・うなずき あいづち 拍手 等の反応をしながら 友だちの考えと比べて、共通点や相違点を見つけながら、 また い で発言することができる。 学年に前した話し方で、結論を先に、その後で根拠(理由)を説明する話し方(結論先行型)ができる。 ペア・トライアングルや全体での話し合いの結果から、 考えを深める ことができる。(考えの付加・修正・強化の姿勢) 学習中の自他のよさやがんばりを認め合い、評価し合うことができる。			
③ 教師の基本的な指導技術の向上 始業時刻と終業時刻を守って、授業を行っている。 教室の整理整頓(机・棚・児童の作品等)を行い、環境美化に努めている。 毎時間「めあて」と「まとめ」を、きちんと板書し、板書の構造化を図っている。 思考させる時間と表現させる時間(書く・交流)を保障している。 継続的なノート指導を行っている。 子どもが1回聞いて分かるような短く的確な説明や、ぶれない指示を心がけている。 思考を促す比較活動の具体化をし、読みを深めさせることを意識した授業の実践をした。 子どもの発言の連続で授業が進んでいくような発問を心がけている。(子どもA:教師B) 個別支援の工夫(机間指導や声かけ、ヒントカード、個別の問題の準備…等)をしている。 朝の言語活動、放課後の補充タイムをきちんと実施している。			
④ 学級経営 常に笑顔を意識し、子どもたちに笑顔で接した。 登校時の子どもたちを教室で迎えたり、休み時間の子どもたちの人間関係や行動について観察し、実態把握及び児童理解を行った。 子どもたちとの関わりを重視し、個々の存在を大切に励ましや賞賛等ができた。 「間違いを言える」「間違いを認める」「他のよさを認める」等の学級での主体的風土をつくるための指導を行った。			
⑤ カリマネの機能を活かした職務・校内研修への取組 自己の校務分掌を把握し、計画的に企画・立案・起案・実施することができた。 実施後の評価をもとに、改善(来年度へ向けての具体的な取組)を明らかにした。 校長、教頭、教務主任及び教職員と連携を図りながら、校務分掌を遂行することができた。 授業づくりについて、自分の考えを積極的に述べる事ができた。 授業研究及び授業整理会を通して、日々の授業づくりの具体化(週計画案作成時等)を図ることができた。 国語科の授業づくりを他教科及び他領域に活かす授業づくりができた。 授業研究及び授業整理会を通して、自己の授業力(授業構想力・授業実践力)を高めることができた。			

平成24年度の結果分析により課題が明確に。 **Check!**

平成25年度は新たな評価項目を付加し、これまでの項目も重点目標に合うように修正。
Action!

資料② 重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価

- ② 平成24年度の児童対象の学習満足度アンケートの結果分析を教職員全員でチェックし合い、全体考察の欄に改善策を挙げた。平成25年度は、各学年の指導に反映するよう、学年ごとに改善策を記入する欄を設け、それぞれの課題・改善策を出し合い、共有していくことにした（資料③参照）。
- ③ 平成24年度の各学力調査・市販テストの結果分析（資料④参照）をもとに、学年ごとに落ちている単元・領域等を洗い出し、学年の系統を考慮に入れながら、国語科・算数科において重点単元を決め、各10時間の加配を行った（資料⑤参照）。

〈学習満足度 アンケート〉集計結果

※ 数字は、良い評価をしている児童の割合(%)を示す。緑字は85%以上、赤字は70%未満、黄塗は90%以上達成

評価項目	主として教師	主に児童	平均	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
①話の分かりやすさ				6	98																						
②説明する時間				2	91																						
③授業の開始・終了時刻				6	90																						
④学習の進め方				3	95																						
⑤思考・表現する時間の確保	70	91	71																								
⑥分かりやすい板書	96	100																									
⑦発言しやすい雰囲気作り	91	71																									
⑧考えや思いを聞く受容的態度	87	71																									
⑨ノートや作品の評価	73	81	86	88	88	94	91	91	96	67	100	100	85	86	89												
⑩質問のしやすさ	96	100																									
⑪毎日の学習の楽しさ	91	100	71	100	96	100	83	100	91	90	95	94	100	88	100	96	100	67	100	92	95	89					
⑫机の上のルール	91	96	83	100	78	64	100	92	84																		
⑬話を聴くこと	83	96	83	96	91	80	100	75																			
⑭友達の考えにつなぐこと	65	65	71	88	78	56																					
⑮自分にもとずこと																											
平均	85	91																									

平成24年度の結果分析により全員が課題を共有化。
『聴く』を最重点とし「聴いて考え、考えてつなぐ」授業展開を目指すことが校長より明示。 **Check!**

全体考察だけでなく、学年ごとの考察も行い、それぞれの改善策を共有化。
Action!

〈全体考察〉

- ・3学期は、全項目に於いて数値の向上している学年が多い。特に良好な項目は、①②④⑥⑧⑨で、年間を通して良い数値を達成している。その要因は、校内研修を通して、話し方や説明する時間、学習の進め方、分かりやすい板書、受容的態度、ノートや作品の評価等について、児童の実態と照らし合わせながら、各担任が指導術を磨いた成果だと考える。来年度に向けて、研修の更なる日常化を図り授業改善に努めたい。
- ・⑫については、学期を追う毎に数値が下がった傾向が見られた。年度当初に、全校で机上のルールを確認し、定期的にチェックし100%の達成を目指したい。
- ・⑬⑭⑮については、主題研修の「聴くつなぐもどす」言語活動との関連を図り、発言の仕方や学び方など学年に応じた具体的なモデルを提示することで、児童の意を高めていく必要がある。併せて、本年度回数実施した学級相互訪問の取り組みを一層充実させていきたい。

↑ 資料③ 児童への学習満足度アンケート

平成24年度 市販テスト(4教科)の平均点と考察

学年	国語科	算数科
1年	1学期 2学期 3学期 年間	1学期 2学期 3学期 年間
2年	1学期 2学期 3学期 年間	1学期 2学期 3学期 年間
3年	1学期 2学期 3学期 年間	1学期 2学期 3学期 年間
4年	1学期 2学期 3学期 年間	1学期 2学期 3学期 年間

1学期の国語科の成果○・課題▲・改善策→

(1年)
○言語の技能(漢字)は、家庭学習や自学、個別指導の継続でどの子どももポイントアップした。
▲全体的に話す・聞くができていない。→条件を与えて話を聞く、質問や説明の仕方について意識して聞かせる等の指導が必要。
(2年)
→話す・聞くに關しては、全員がしっかり聞くために、聞いた後で要点を言わせる機会を創り出し習得付けていく。
(3年)
▲聞くテストの内容が難しかったので点数が下がった。→聞き方の指導を継続的に行う。
(4年)
○言語の知識の量が増えた。意味調べや漢字練習の効果だと考えられる。EXテストは比較的できていた。
▲昔話「木更のし」は、言葉の意味理解が不十分だった。
(5年)
○説明文の読み取りが良好で、「読む」の点数が向上した。2、3学期に校内研修で取り組んだことが成果として表れた。毎朝ミニテストを実施したことで漢字の定着につながり、ほとんどの子どもが期待値を上回った。
(6年)
○「読む」力が伸びた。

(1年)
○数の構成の読み方の理解が不十分。→での説明体験が重要。
(2年)
→「考え方」について考えていく方法も実践する。→(繰り返し)。
(3年)
▲見直しをきちんとしていることがある。→(4年)
○単元数が少ないことが多かったことも要因。
▲EXテストは低い点数。
(5年)
○知識・技能面より問題の定着が見られるようになった。
(6年)

平成25年度の重点課題を決定し、国語科・算数科に各10時間加配。
Action!

平成25年度 国語科・算数科 重点単元一覧

	1年生	2年生	3年生	4
国語科 重点単元	<p>〈1学期 加配〔3〕 「どうやってみまもるのかな」6+3 ・文章のねらいを意図して読む+1、書く+2</p>	<p>〈1学期 加配〔3〕 「ふろしきはどんなぬの」1+2+3 ・文章を読み比べる読む+1、書く+2</p>	<p>〈1学期 加配〔4〕 「自然のかくし線」6+4 ・段落毎の内容読む+3、書く+1</p>	<p>〈1学期 「ヤドリンチャ」 ・読後談読む+</p>
算数科 重点単元	<p>〈1学期 加配〔4〕 「たしざん(1)」8+4 ・こうえん+2 ・うみ+2</p>	<p>〈1学期 加配〔3〕 「たし算とひき算の筆算(1)」1+1+3 ・たし算+1 ・ひき算+2</p>	<p>〈1学期 加配〔3〕 「一億までの数」10+3 ・万の位+1 ・10億位10億位+2</p>	<p>〈1学期 「1けた算の筆算」(3歳)が難</p>
	<p>〈2学期 加配〔4〕 「いろいろなふね」1+3+4 ・正しく読む読む+2、書く+2</p>	<p>〈2学期 加配〔4〕 「ピーパーの大工事」1+3+4 ・大事な言葉、順序読む+2、書く+2</p>	<p>〈2学期 加配〔3〕 「もうどう犬の訓練」1+1+3 ・内容をくまなく読む+1、書く+2</p>	<p>〈2学期 「くらし」</p>
	<p>〈3学期 加配〔3〕 「歯がぬけたらどうするの」1+3+3 ・自分はどうするか考えて読む+2、書く+1</p>	<p>〈3学期 加配〔3〕 「虫は道具をもっている」1+4+3 ・似ている所と違う所読む+1、書く+2</p>	<p>〈3学期 加配〔3〕 「人をつつむ形-世界の家めぐり」1+1+3 ・絵や写真にも注意して読む+2、書く+1</p>	<p>〈3学期 「ゆめの作る」 ・筆習字読む+</p>
	<p>〈3学期 加配〔2〕 「大ききくらべ」5+2 ・とかい(時)分+2</p>	<p>〈3学期 加配〔3〕 「10000までの数」8+3 ・10000までの数の表し方・系列・大小+3</p>	<p>〈3学期 加配〔4〕 「2けたをかけるかけ算の筆算」7+4 ・(2歳)(2歳)の筆算+3 ・(3歳)(2歳)の筆算+1</p>	<p>〈3学期 「分教」 ・筆習字</p>

※ 担当学年で随時修正をする。

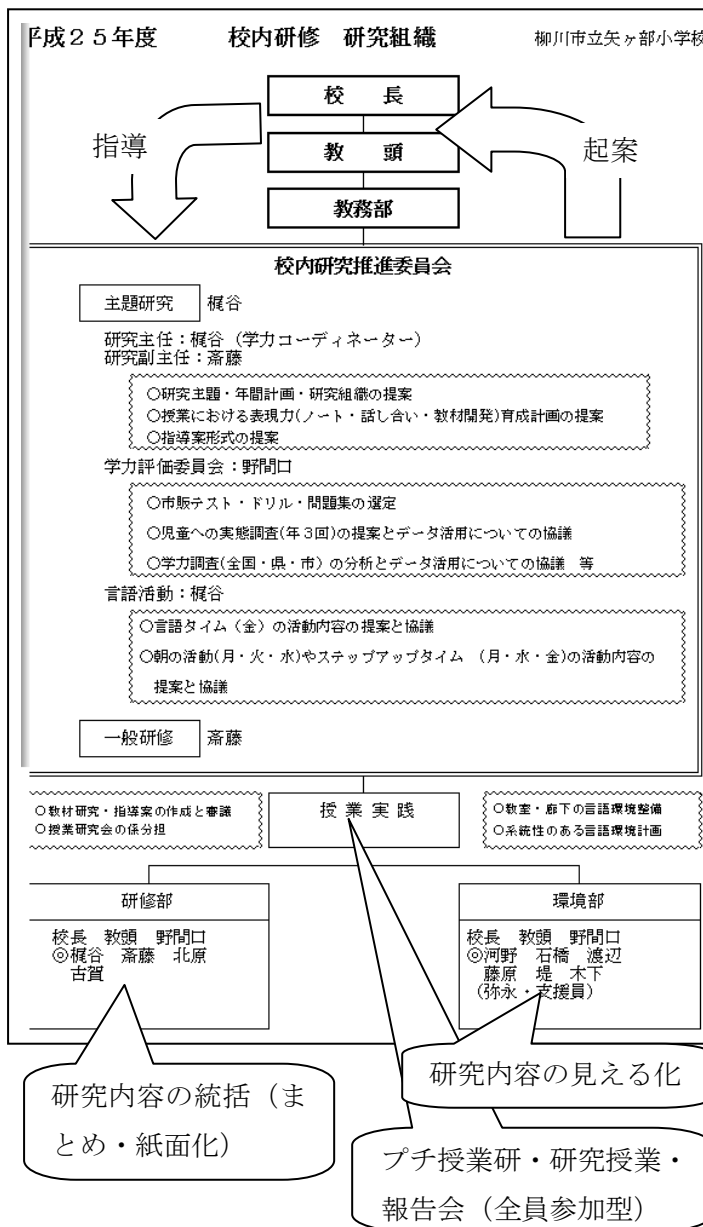
↑ 資料⑤ 重点単元一覧

(2) 【計画の共有化】段階における働きかけ

① 平成24年度の課題を受けて、研究推進委員会を開き、平成25年度は、研究主題「読みを深め合う子どもを育てる国語科学習指導～思考を促す比較活動を通して～」を設定した。教職員の意識としては、「“読みを深め合う”とはどんなことか?」「どんな子どもの姿が考えられるのか?」「思考を促す支援、比較活動とは?」など、様々な疑問や研究の方向性についての不安があった。そこでまず、1学期初期の段階での研究構想の共有化と今後の方向性の共有化を図るために、ア～エの手順で計画づくりを進めた。

- ア…研究組織づくり
- イ…研修年間計画づくり (省略) **Plan!**
- ウ…研究内容の具体化
- エ…校内研修の評価・改善

ア・エは主に教務主任が、イ・ウは主に研究主任・副主任が中心となって推進した。(資料⑥参照)



ア～エの内容については、校長・教頭に起案をし、指導を受けた後、教職員全体で話し合っ
て決定していった。

アの組織については、学年部会も考えられたが、7人という少ない人数のため、支援加配・養護教諭・司書教諭を含め全員参加型での研究を進めていくことにし、役割として、研究を内容を統括する研修部、見える化を図るための環境部に分けた。

イの研修年間計画づくりにおいては、1学期にプチ授業研 (※)・2学期に研究授業・3学期に研究報告会を行うため、その日程を定めていった。

ウの研究の内容については、これまでの研究を土台にして、1学期に提案授業やプチ授業研を行い、研究主題の内容を価値づけ、具体化していくことにした。(※) プチ授業研については、【実施】段階における働きかけで詳しく述べる。

エの評価・改善については、(1) で述べた通りである。

↑ 資料⑥ 校内研修研修組織と内容

(3)【実施】段階における働きかけ

本校の公開授業には次のような二つのパターンがある。(資料⑦参照)

ア. 指導案を作成して公開する授業研究

イ. 教材分析と板書・発問計画のみを作成して「読みを深め合う段階(15~20分)」を公開するプチ授業研究

チーム矢ヶ部の授業づくり

**キーワードは、
「研究の日常化」と「自分意識」**

矢ヶ部小学校の校内研究推進のキーワードは、「研究の日常化」。つまり、日常の授業づくりに生きるような研究をすすめることです。そのために、自分の研究を自分だけのものにしないうことと、他の教師の授業づくりを他人ごとに関わらせず、自分意識を持って関わることです。

全員が関わる授業づくり

矢ヶ部小学校の公開授業は2パターン

指導案を作成して公開する授業研究と、教材分析と板書・発問計画のみを作成して公開するプチ授業研究があります。

年に1~2回、指導案を作成し、「事前授業→授業→授業整理会」を行い、内容・方法を深く研究します。
(パターンⅠ)

学期に1~2回、板書・発問計画を作成し、「深める段階(15~20分)を見合い」シートの研修を行います。
(パターンⅡ)

(パターンⅠ)

公開授業に向かって校内研究を進めていく際、授業づくりが授業者任せになると、せっかくの研究が授業者の研究のみに終わってしまうことがあり、他の学年・学級に広がらないという課題がよく見られます。

授業後の協議会においても、一方的な質問・意見が多く、次の日からの授業に生かされないものや他の学年・学級の授業に生かされないものになりがちです。

その原因として、授業の改善策が具体的に出されないこと、授業づくりに他の教師が深く関わっていないことが挙げられます。

「研究授業、お疲れ様!」と、労いの言葉はあるものの、「明日の授業は、こうしよう。」「自分の学級では、こうしよう。」という、学校全体に広がる研究になっていないのです。

(パターンⅡ)

パターンⅠの授業研究は、深い教材研究のもと、何度も指導案を検討し、事前授業でシミュレーションをした後に、授業を公開し、ワークショップ授業整理会を行います。

授業者も参観者も大変勉強になり、実りの多い研究であると考えます。

しかし、その授業にかかる時間と労力は、計り知れないものがあります。

日常的に授業をどう変えるか、という視点に立つと、指導案づくりに時間をかけず、毎日の授業に生かせる授業づくりも必要であると考えます。

そこで

そこで

全員が関わる事前授業をします

- ① 事前に教材文を全員が読んで、教材分析をします。
- ② 授業1週間前に、事前授業(板書・発問計画)を教室で行います。
※指導案審議ではなく、授業づくりをどうするかで内容・方法についての意見を出し合います。

準備に負担がかわらないようにします

- ① もちろん、教材研究は必要です
- ② 授業前日に、ねらいと板書・発問計画を配布します。
※指導の流れは授業者の手書きのノートに記されており、パソコンに向かう時間を省略します。

授業者による授業が行われます

- ① 事前授業から明らかになった授業の視点をもとに、板書・発問の記録をとったりビデオをとったりします。
- ② 3色の付箋に成果(黄)課題(桃)改善策(青)を書きながら、授業を見ます。

授業者による授業が行われます

- ① 授業のねらいと比較思考を促す手立て(板書・発問)に焦点を絞って授業を行います。「深める段階」(15~20分)のみ参観します。

全員が関わる授業整理会をします~ワークショップ型授業整理会~

- ① 授業中に記録した3色の付箋を出し合いながら、授業の振り返りをします。
※特に、課題→改善策を中心に話し合い、次の授業に生きるようにします。
- ② 毎回、進行役・整理役を交代し、授業のまとめとなる研修便りもリレー形式でつくりまします。

プチ授業整理会をします

- ① 授業後に、教室や職員室で立ち話をし、授業の振り返りをします。
(スタンディングミーティング)
- ② 授業中に記録した3色の付箋を模造紙に貼って授業者にわたします。
※特に、話し合いの時間は設けず、課題→改善策を中心に、次の授業に生かします。

↑ 資料⑦ 本校の公開授業のパターンとその流れ

この二つのパターンにおける働きかけを、行っていった。

① **アーP** 教材研究や授業づくりに役立つ資料の提供や事前授業の設定を行った。

ここでの約束として、事前授業の前に必ず教材文を読み、自分なりの解釈をしておくこと、担当学年の授業とのつながり（系統）を考えて、自分だったらどんな授業をするかを考えておくこととした。

実践事例Ⅰ〔研究授業：6月〕第5学年 書き手の意図を考えながら新聞を読もう「新聞記事を読み比べよう」では、授業実践をするに当たり、他の担任に「自分の授業ではどうするか。」ということを考えてもらうために、全学年の系統がわかる表を作成し、提供した（資料⑧参照）。この資料を提供したことにより、他の担任も、読み比べ単元における授業で、読みのねらいや視点をもって授業実践を行うことができた。また、他の単元でも、この資料⑧のような見方で教材を見ていくと、指導の系統が明確になることから、積極的に他学年の教科書を見て教材研究する姿が見られるようになった。

読み比べ単元を読み比べよう（内容編）				
目的：読み比べ単元の指導目標・内容・方法などを比較することにより、学年の系統性を把握し、各学年の指導に役立てる。 《柳川市立矢ヶ部小学校 研修部》				
学年・主題・単元名	●ねらい ◎教材設定の意図	学習指導要領 赤：重点指導事項 青：言語活動	比較する文章	読み比べの視点
【第6学年】 ◆書き手のくふうを考えながら新聞の投書を読もう 「新聞の投書を読み比べよう」 配当時数6時間（読む4・書く2）	●読み手を説得するための工夫を読み取る。 ◎新聞の投書と比べて読み、読み手を説得するための工夫がどのようになされているかをとらえ、文章を評価する力を育てる。	C(1)イ 「目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。」 C(1)ウ 「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらかきだりすること。」 C(2)ウ 「編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。」 B(1)ウ 「事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。」	4つの投書 投書①：限界をこえた投書には疑問 投書②：勝利を求めてこそスポーツに意味が 投書③：楽しんでするものそれがスポーツ 投書④：限界まで努力することに価値がある	次のことを考えながら読み比べよう。 ・それぞれの書き手は、どんな意見や主張を述べているか。 ・読み手を納得させるために、理由づけの仕方や根拠の挙げ方にどのようなくふうをして書いているか。 ・自分は書き手の意見や主張に対してどう思うか。
【第5学年】	略	略		

読み比べ単元では、「何を」「どのように」比較して読ませ、「どんな力をつけるのか」を研究していった。

系統を考えて授業づくりをするための資料提示。 **Plan!**

↑ **資料⑧ 読み比べ単元の系統表**

事前授業では、教室から離れた場所での指導案審議とは違い、子どもの姿をイメージしながら意見交換が行われるため、つまずきや必要な支援の方法が見えてくるよさや、だれもが意見を言い合える雰囲気になるよさがあった。「自分だったら・・・」という意見が多く出され、研究授業が授業者だけのものではなくなっていった。

また、指導案（資料⑧参照）には、研究主題に関わる「本時の主張点」と「読みを深め合う段階の【学習の山場】」を示し、実践から研究の内容を明らかにしていった。特に、【学習の山場】を考えることで、どの担任も、具体的な比較活動の内容や支援の方法を考えることができるようになった。

<p>本時 平成25年6月24日(月) 第6校時</p> <p>本時目標</p> <p>1 新聞記事の写真は、書き手が一番伝えたい記事の内容(意図)が読み手により強く伝わるようにする役割があり、写真の撮り方の違いで受け取られる記事の印象も違うということを読み取ることができるようにする。</p> <p>2 二つの記事をもとに、写真がある場合とない場合を入れ替えた場合の印象を比較させることにより、意図によって載せる写真が変わることに気づかせる。立場に立って、記事と写真の関係について話し合えることができるようにする。</p> <p>準備 流れ図 本時文 写真(児童用)</p> <p>展開</p>	<p>【本時の主張点】</p> <p>本時のねらいにせまるために、次の3つの比較活動を行う。</p> <p>① 二つの記事と二枚の写真と比較させることにより、どの記事にどの写真をのせるかを選ばせ、その根拠と理由を話し合わせる。(はじめの読み)</p> <p>② 写真がある場合とない場合を比較させることにより、読者の興味や記事の伝わり方が違うことに気づかせ、写真の効果について話し合わせる。(深まった読みI)</p> <p>③ 写真を入れ替えて比較させることにより、伝えたい記事の内容と写真が合わないことから、書き手の写真の選び方について話し合わせる。(深まった読みII)</p>
<p>テーマと関わる内容の明示。</p> <p>Plan!</p> <p>1 二つめあてをつかむ。</p> <p>(1) 予想していた写真の内容とその根拠と理由を発表する。</p> <p>A社: アユの写真、つり人の写真・・・</p> <p>B社: 多摩川の写真、人々の写真・・・</p> <p>(2) 記事に合う写真を選び、本時学習のめあてをつかむ。</p> <p>めあて 書き手は、何のために写真をのせているのだろう。</p>	<p>思考を促す支援</p> <p>○ 前時に予想していた写真の内容を出し合わせ、記事の内容と写真の選び方には関係があることに気づかせる。</p> <p>○ 二枚の写真を提示し、記事に合う写真を選ばせることにより、書き手が写真をのせた意図を考えていくというめあてをつかませる。</p> <p>○ 記事に合う写真を選んだ根拠と理由を書かせることにより、記事の内容と写真に関連づけて読むことに気づかせる。</p> <p>○ 三つの比較活動を通して、写真を読み解かせ、記事との関係を考えさせる。</p>
<p>「読みを深め合う段階」の具体的支援の明示。</p> <p>Plan!</p> <p>・記事の内容や見出しの言葉がわかる。</p> <p>・写真の効果(役割)について話し合う。</p>	<p>【学習の山場】</p> <p>比較活動① 記事に合う写真はどっちか?</p> <p>多摩川 B社 アユ</p> <p>自然に親しむ小学生</p> <p>さかさなもよおし</p> <p>多摩川をさかのぼるアユ</p> <p>さかのぼっている</p> <p>若アユ</p> <p>きらめく銀のうろこ</p> <p>しぶきを上げてはねあがる</p> <p>比較活動② 書き手はなぜこの写真を選んだのか? もし、写真がなかったら...?</p> <p>多摩川 B社 A社</p> <p>多摩川の様子が伝わりにくい。</p> <p>多摩川の様子が伝わりにくい。</p> <p>多摩川の様子が伝わりにくい。</p> <p>比較活動③ 写真を入れ替えたなら?</p> <p>A社 B社</p> <p>人々は関係ない? 記事にないことが写真にのっている。</p> <p>アユの様子はわかるが、多摩川の様子がわかりにくい。</p> <p>入れ替えると、筆者の意図が伝わりにくい。書き手は写真を選んでのせている</p>
<p>4 本時学習をまとめ、読みの深まりの振り返りをする。</p> <p>まとめ</p> <p>A社の書き手は、しぶきをあげて勢いよくはね上がる「江戸前アユ」の若々しい姿を中心に伝えようとしている。</p> <p>B社の書き手は、アユが増加するほどによみがえった多摩川の自然に親しむ人々の様子を中心に伝えようとしている。</p> <p>つまり、書き手は、伝えたいことの中心が読み手により強く伝わるように写真のとり方の違いまで考えて写真を選んだのせている。</p>	<p>○ 書き手が写真を載せる意図について、まとめを書かせるために、児童の実態に応じた支援を行う。</p> <p>a: 文型を与える。</p> <p>b: キーワードを与える。</p> <p>c: A社・B社に合うまとめの文を選択させる。</p>

↑ 資料⑨ 指導案の形式の統一

② [ア-D] 授業研究当日の役割分担を行った。

研究授業当日は、毎回、研修グッズとして、付箋(3色)・マジック・ホワイトボードを

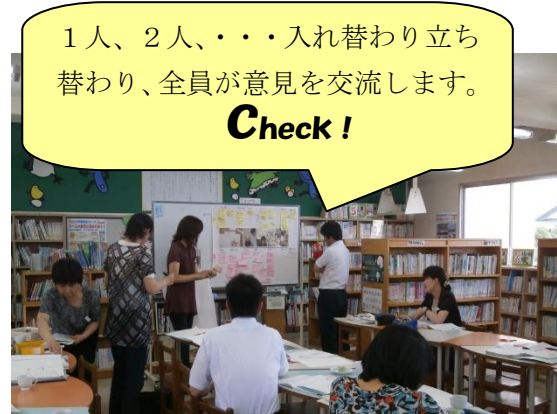
準備しておき、事前授業で明らかになったことをもとに、発問・板書を記録したり、3色の付箋に成果（黄）課題（桃）改善策（青）を書いたりビデオ撮影をしたりした。

③ **アーC** ワークショップ型授業整理会の運営を行った。

本校のワークショップ型授業整理会のファシリテーター（進行役）は、全担任が交代で行うことにした。従来は、教務主任や研究主任が行ってきたことを、全員が行うことで、研修への参画意識が高まり、全員が研究推進者の一人であることを自覚し、授業や研究の資質・能力も高まると考えたからである。



リレー形式でファシリテーター（進行役）は毎回変わります。

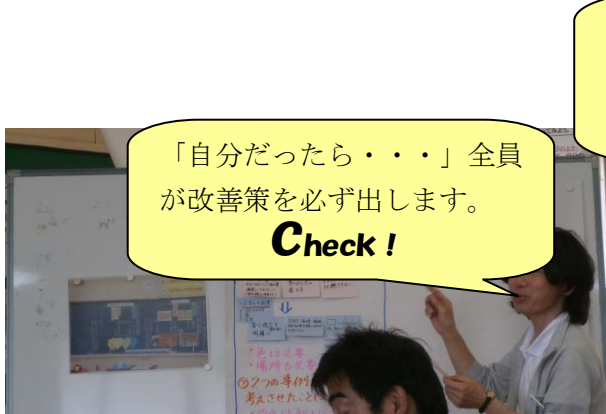


1人、2人、・・・入れ替わり立ち替わり、全員が意見を交流します。

Check!

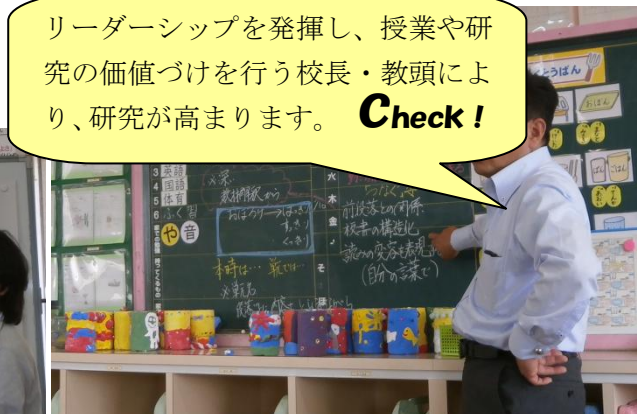
↑ 資料⑩-1 板書中心の協議会

↑ 資料⑩-2 図書室での協議会



「自分だったら・・・」全員が改善策を必ず出します。

Check!

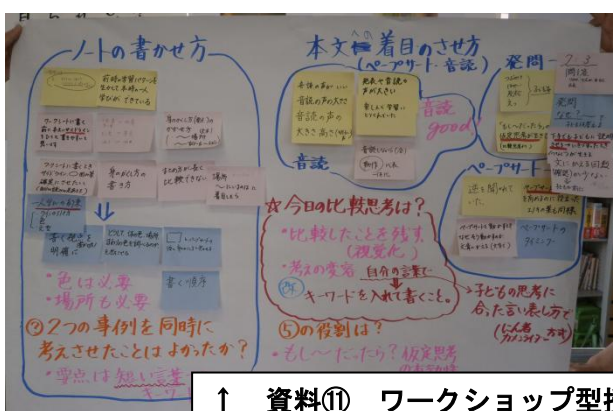


リーダーシップを発揮し、授業や研究の価値づけを行う校長・教頭により、研究が高まります。

Check!

↑ 資料⑩-3 参画意識が高まる協議会

↑ 資料⑩-4 校長・教頭による指導



↑ 資料⑪ ワークショップ型授業整理会のまとめ

また、ワークショップ型授業整理会のよさには、年齢・経験・専門に関係なくだれもが意見が出せるというよさがある。資料⑩のように、校長・教頭・研究主任はもちろん、各担任、専科、養護教諭まで全ての教職員が意見を述べる事ができる。その中で、ファシ

リテーター（進行役）は、言いっぱなしにならないように、研究主題にせまる項目・視点ごとに整理し、改善策をまとめていった（資料⑪参照）。

④ **アーA** リレー研修だよりの役割分担を行った。

研究のまとめについては、従来は3学期にそれぞれの授業者が個々のまとめを印刷して製本し、保管しておくようにしたり、研究主任が研修便りとして一人でまとめたりしたものが多かった。しかし、このまとめ方では、研修の日常化につながらなかったり、研究主任一人の資質・能力が高まるだけになってしまっていたりした。そこで、ワークショップ型授業整理会でまとめたものを**ファシリテーターが書き（研修便り①）、授業者本人が考察を書く（研修便り②）**ようにした（資料⑫参照）。

平成 25 年 7 月 29 日（月）
柳川市立矢ヶ部小学校

研修だより Vol. 7

6 月 24 日（月）の 5 年 1 組 野間口 美奈子先生の授業・授業整理会に

単元 書き手の意図を考えながら新聞を読もう「新聞記事を読み比べよう」

本時目標

- 1 新聞記事の写真は、書き手が一番あり、写真の撮り方の違いで受け取る
- 2 二つの記事をもとに、写真がある書き手の意図によって載せる写真がての考えを深め合うことができる

【本時の主張点】

本時のねらいにせまるために、次の

- ① 二つの記事と二枚の写真と比較理由を話し合わせる。（はじめの
- ② 写真がある場合とない場合を比較写真の効果について話し合わせる
- ③ 写真の

1 授業

(1) 子ど

- ◎理由
- ◎写真を選ぶ活動は、意欲的に用
- ◎根拠を入れた自分の考えをもつ
- ◎文末表現と写真をつないでよく
- 自分なりの考え（根拠と理由）
- ※写真と関連する文に線を引かせ

(2) 写真の提示について：提示の仕方と

- ◎文章と結びつけて写真に丸を
- ◎写真を後から提示したことで
- ◎写真の必要性にせまることが
- ◎写真なしの予想は、見出しや
- ◎写真を本時まで見せずに本文と
- やすい。

(3) 写真と言葉のつながり

- ◎AとBの記事に合う写真は、ど
- て、思考、判断をさせる上で有
- ◎記事に合わせた
- 写真の理由として見出しに目
- 写真に合った書き手のメッセ

資料⑫ 研修便り①

↓ 研修便り②

研修だより 7-② 5年1組

柳川市立矢ヶ部小学校

6 月 24 日（月）5 年 1 組の授業について報告します。

単元 書き手の意図を考えながら新聞を読もう「新聞記事を読み比べよう」

比較活動①
記事に合う写真はどちらか？

A社 しぶきをあげてはねあがる
きらめく銀のうろこ（若アユ）
さかのぼっている

B社 多摩川をさかのぼるアユ
さまざまなおし
自然に親しむ小学生

比較活動②
書き手がなぜこの写真を選んだのか？
もし、写真がなかったら？

A社 アユの様子が伝わりにくい
B社 多摩川の様子が伝わりにくい

比較活動③
写真を入れ替えたなら？

A社 人々は関係ない記事になり
ことが写真にのっている
B社 川の様子が伝わりにくい
アユの様子が伝わりにくい

Action!

全員が自他の授業を価値づけるリレー形式の研修便り。

比較活動の視点から

【成果】

- **比較活動①「記事に合う写真はどちらか」**を考えるための写真と記事の比較
写真に写っているものと記事に書いてあることを関連付けて根拠と理由を書くことができた。「しぶきをあげてはねあがる」「きらめく銀のうろこ」(A社)や「多摩川」「もよおし」(B社)などのキーワードに着目することができたことからも書き手の伝えたいことの中心を読み取らせる上で有効であった。
- **比較活動②「書き手が写真を選んだわけ」**を考えるための写真と写真の比較
「書き手がなぜこの写真を選んだのか」「写真があるとなぜよいのか」という発問により、写真からわかることを出し合い、実際に見ていなくても記事の内容がよくわかることに気付くことができた。写真の効果に気付かせる上で、写真の比較は有効であった。
- **比較活動③「書き手の意図」**を考えさせるための写真と記事の比較
写真を入れ替えることで、書き手が記事の内容をより詳しく伝えるために写真を載せていることに気付くことができた。写真と記事の内容を関連付けて考えさせることは、書き手の意図を深く読み取らせる上で有効であった。

【課題】

- **提示する写真の枚数**
書き手の意図に視点を持っていくためには、3～4枚あってもよかったのでは？ ← 情報が多くなりすぎるので、2枚の方がよい。本授業では、後者の2枚だったが、どちらがよいのか？
- **写真を読む活動**
写真をもっと詳しく読む時間が必要だった。中心を読み取ることはできたが、写真の効果をより深く理解するまでにいたらなかった。
- **比較の順序**
書き手の意図を読み取らせるために、①→②→③の順序でよかったのか？①・②は一括してもよかったのでは？

研修便り① 授業Ⅰのファシリテーター → 授業Ⅱのファシリテーター → 授業Ⅲのファシリテーター → … → 授業Ⅵのファシリテーター → 授業Ⅶのファシリテーター

研修便り② 授業Ⅰの授業者 → 授業Ⅱの授業者 → 授業Ⅲの授業者 → … → 授業Ⅵの授業者 → 授業Ⅶの授業者

体化した支援が必要である。

- 本文と学習ノートが対応して見えるようにしたため、根拠を見つけたり理由を書いたりするのに効果的だった。考えの変容も見えるノートだった。
- 比較したことをもとに、考えの視覚化ができる板書と、ねらいにせまる発問をしていく必要がある。

⑤ **イーP** 重点目標に係る授業づくりを意識した週案の作成を行った。

深い教材研究と審議の積み重ねのもとで行われる研究授業の成果を日常の授業において発揮させ、研修の日常化を図るために、週案の中に重点目標の具体的方策を記入する欄を設けた（資料⑬参照）。週案の形式は、平成24年度までのものに、改良を加え、国語科・算数科の教科別にねらいを書いたり、授業の視点を書いたりする欄を設けたりした。また、校長室と職員室に掲示することにより、連絡・調整の時間が省かれ、会議の簡素化を図ることができた。

平成25年9月16日～平成25年9月27日(第3～4週) 柳川市立赤ヶ部小学校					学年担任名()				
期	日	9/16(水)	9/17(木)	9/18(金)	9/23(月)	9/24(火)	9/25(水)	9/26(木)	9/27(金)
開	運	○クラブ活動	○代表委員の取組(スポーツ集会) 会議室2～8年生参加	○木曜研修 15:30 口賀間教室12:20 八幡字室(宗輝)	○委員会の集まり(言語タイム)8:30 ○ALT来校④4年⑤1年	○特別研修(研究授業)3校時 40:1 指導・観察(校長・教頭) ○プロ授業研究 40:1 5校時? 口賀間教室・長谷製作室 校内練の切り口	○縦断・横断・縦断・スポーツ集会3校時	○木曜研修 ○プロ授業研究 30:1 ④の1-⑥の1 ○校内研修～主観研 ○校務会議資料入力 口賀間教室12:20	○ALT来校⑤2年⑥8 ○5年⑤校長②年 ○定時退校日 口賀間教室12:20 校内練の切り口
出	張	○学校事務共同実施 14:00 二階 口賀間教室	○キャリアアップ講座 (校長・教頭) 校長室	○大和中央点検 (校長・教頭) 校長室			○校内研修担当室・指導教諭研修13:10 1小学校 横谷		○市町村立学校事務 職員研修会18:00 横谷 田中 ○人間関係 校長
出	張	重点目標を意識した教室訪問枠を自分で決める。 Plan!							
出	張	重点目標の具体的方策・評価・改善策を記入する欄 Plan! → Action!							
出	張	校長・教頭・教務主任のコメント Do! → Check! → Action!							
出	張	【重点目標】よく聴き、しっかり考える子どもの育成							
出	張	今週(学)かかんかえる子ども 重点							
出	張	具体的方策							
出	張	評価・改善策							
出	張	4-3-2-1							
出	張	4-3-2-1							
出	張	教務主任 教頭 校長 (口賀間)							

↑ **資料⑬ 重点目標に係る授業づくりを意識した週案**

⑥ **イーD** 教室訪問による見取りを行った。

重点目標を意識し、具体的方策を考えた時間を教室訪問の時間とし、赤丸や赤枠がある時間には、校長・教頭・教務主任による教室訪問を行った。教室訪問についての評価や学級経営について等のコメントの記入欄も週案に位置づけている（資料⑬参照）。

⑦ **イーCA** プチ研修や研修ボードによる授業の見える化と週案への評価・改善の記入を行った。

研究授業と違って、担任をしている教職員にとって日常の授業は互いに見えにくい。しかし、この日常の授業による児童への影響の方が、研究授業よりも大きいと考える。1年に1～2回の研究授業を見合うことで、果たして本当に協働してすすめる研究ができるといえるのだろうか、と考えた。そこで、研究の重点である「読みを深め合う段階」の15～20分だけを見合うショート授業研を実施することにした。これをプチ研修と名

付け、指導案なし、板書・発問計画のみの授業を行うことにした。このプチ研修のねらいは、研究授業のように時間はかけないが、日常の授業づくりに生かすために、教材研究・教材解釈の力をつけることである。

また、研究の見える化を図るために、職員室に研修ボードを設置することにした。プチ研修の授業整理会は、この研修ボードを囲んで行った。これを、スタンディングミーティングと名付けた。文字通り、ほとんどが立ったままで、プチ研修について意見を出し合った。「読みを深め合う段階」に協議の柱を決めているので、短時間で行うことができた(資料⑭参照)。



↑ 資料⑭ スタンディングミーティングー研修ボードを囲んでのプチ研修の授業整理会ー

しかし、このプチ研修だけでは共有化は十分ではないと考え、研修ボードには、教室訪問を行ったときの板書や教室環境(言語環境)など、重点目標に関わる写真や情報の掲示を行った。週案については、重点目標に係る具体策を書くだけに終わらないよう、2週間に1度、評価・改善策を記入する欄も設けた(資料⑬参照)。

(4)【成果と課題の共有化】段階における働きかけ

- ① 重点目標(学力面)に対する達成状況の教職員の自己評価の結果分析をした(資料②・⑮参照)。全体的にポイントが上昇しているが、特に目立って評価が上がった項目は、新設した「教職員のカリマネの機能を活かした職務・校内研修への取組」の欄である。このことから、教職員の授業づくりへの思いや研修への取り組む姿勢の向上が見られることがわかる。これを受けて、本年度は、重点目標「生き生きと活動し、粘り強く考える子どもの育成」を目指し、それを具体化した項目を教職員全体で共有化し、教育実践を行っている。
- ② 児童対象の学習満足度アンケートの結果分析をした。特に、「分かりやすい板書」「考えや思いを聞く受容的態度」「ノートや作品の評価」について良い評価をしている割合がアップしており、担任の授業力に対する評価が上がってきていることがわかる。このことから、各学年ごとに改善策を考え、それを共有し合ったことにより、教師の意識の変容とPDCAサイクルによって学習活動が評価・改善されてきたことが児童による評価からも見取るこ

とができる。課題としては、「考えを関係付けてつなぐこと」が挙げられる。

学級経営	④ 常に笑顔を意識し、子どもたちに笑顔で接した。	-0.1
	登校時の子どもたちを教室で迎えたり、休み時間の子どもたちの人間関係や行動について観察し、実態把握及び児童理解を行った。	+0.1
	子どもたちとの関わりを重視し、個々の存在を大切に励ましや賞賛等ができた。	+0
	「間違いを言える」「間違いを認める」「他のよさを認める」等の学級での支持的風土をつくるための指導を行った	+0.4
カリマネの機能を活かした職務・校内研修への取組	⑤ 自己の校務分掌を把握し、計画的に企画・立案・起案・実施することができた。	+0.5
	実施後の評価をもとに、改善（来年度へ向けての具体的な取組）を明らかにした。	+0.4
	校長、教頭、教務主任及び教職員と連携を図りながら、校務分掌を遂行することができた。	+0.5
	授業づくりについて、自分の考えを積極的に述べることができた。	+0.5
	授業研究及び授業整理会を通して、日々の授業づくりの具体化（週計画案作成時等）を図ることができた。	+0.3
	国語科の授業づくりを他教科及び他領域に活かす授業づくりができた。	+0.3
	授業研究及び授業整理会を通して、自己の授業力（授業構想力・授業実践力）を高めることができた。	+0.1
学級平均		+0.36

教職員の指導力向上に向けての意識が向上し、自己評価が上がった。

Check!

平成25年度の課題を受けて、本年度も項目を修正した。

Action!

←資料⑮ 重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価の変容

③ 各学力調査や市販テストの結果分析をした。研究主題との関係や学年ごとの相関性を見るために、市販テストの結果から、述べる。

国語科の「読むこと」において、1～3年生は、2学期に平均点が上がり、3学期に下がるという傾向が見られたが、いずれも目標値の85点を上回っている。4・6年生は、1学期から3学期にかけて、平均点が上がっている。5年生は平均点が上がり、目標値に達することもできた。全体平均は、2.7点の伸びが見られ、目標達成ができた。（資料⑮参照）

課題としては、個人差があることにより、個に応じた指導の必要性が挙げられる。

(5) 全体考察

カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して、校内研修が協働し、組織的にすすめられたかどうかを、研究の実際（1）～（4）と資料⑮の教職員へのアンケートをもとに考察する。

① 【課題の共有化】段階における働きかけ（CA）

この段階では、重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習満足度アンケート、各学力調査や市販テストの結果分析をおこなった（資料②～⑤）。その結果、

→資料⑮ 市販テストの平均点の変容

学年		読むこと	
1年	1学期	0	0
	2学期	+4.1	1 ↑
	3学期	-0.1	9 ↓
	年間		3
2年	1学期		7
	2学期	+1.9	5 ↑
	3学期	-1.3	4 ↓
	年間		1
3年	1学期		7
	2学期	+4.2	1 ↑
	3学期	-0.2	7 ↓
	年間		3
4年	1学期		7
	2学期	+11.4	8 ↑
	3学期	+5	2 ↑
	年間		5
5年	1学期		7
	2学期	-0.1	↓
	3学期	+9.9	↑
	年間		3
6年	1学期		7
	2学期	+6.2	2 ↑
	3学期	+2.7	↓
	年間		3
全体	1学期		
	2学期		
	3学期		
	年間		

※緑は85点以上達成、赤は70点未満で目標。

資料⑰のウ・オ・キのように、教職員の「それぞれの実践をもとに研究主題をより具体化していこうとする姿（連続）」や「日常的に課題を意識した研究・授業をする姿（発展）」が見られた。このことから、課題を共有化し、評価項目を具体的に示したことで、目指す自己の姿と児童の姿が明確になったと考える。

② 【計画の共有化】段階における働きかけ（P）

この段階では、研修の目標、内容、方法について話し合ったり、年間計画を立てたりした（資料⑥参照）。その結果、資料⑰のウのように、前もって研究主任と連携して資料の提供を行うことができた。このことから、いつ・だれが・どんなことを・どのように研修・授業を行うのかなど、組織の役割が明確になったと考える。

③ 【実施】段階における働きかけ（D）

《授業研究の場合》以下の働きかけを行った。

- | |
|--|
| (1) 教材研究や授業づくりに役立つ資料の提供や事前授業の設定（資料⑧・⑨参照） |
| (2) 授業当日の役割分担・ワークショップ型授業整理会の運営（資料⑩・⑪参照） |
| (3) リレー研修便りの役割分担（資料⑫参照） |

(1) の結果、資料⑰のアのように、「児童の実態をもとに教材研究や支援の在り方を究明する姿」「他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿」が見られた。

(2) の結果、資料⑰のイのように、「他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿」「研究の成果を価値づけ、継承していこうとする姿（連続）」が見られた。

(3) の結果、資料⑰のカのように、「自分の研究成果を他の教職員に広げていこうとする姿」「研究の有効性を分析し、課題に対する改善を加えていこうとする姿（発展）」が見られた。

以上のことから、(1)～(3)の働きかけを行ったことで、次のような有効性があったと考える。

○ 授業者が一人で悩みを抱えることなく、全員が参画意識を持って授業に取り組むことができた。

○ 全員が自他の授業改善を意識し、日常の授業を変えていくための校内研修の在り方が明確になった。

○ 教職員全員が課題を解決するための方法が明確になり、互いの資質・能力の向上に向けて学び合う研修のよさを味わった。

《日常の授業の場合》以下の働きかけを行った。

- | |
|---|
| (1) 重点目標に係る授業づくりを意識した週案の作成（資料⑬参照） |
| (2) 教室訪問による見取り・プチ研修や研修ボードによる授業の見える化と週案への評価・改善の記入欄の設定（資料⑬・⑭参照） |

(1) の結果、資料⑰のキのように、「日常的に課題を意識した研究・授業をする姿」が見られた。

(2) の結果、資料⑰のカのように、「日常的に課題を意識した研究・授業をする姿」「他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿」が見られた。

以上のことから、(1)～(2)の働きかけを行ったことで、次のような有効性があったと考える。

○ 重点課題を意識した週案を活用し、日常の授業から変えていこうとする教職員の意識化を図ることができた。

○ 「これは、どうやって授業しているのですか。」「この資料があったらください。」「このカードの掲示いいですね。」など、研修ボードを見た担任が、当該担任と話す姿が見られるようになった。

④ 【成果と課題の共有化】段階における働きかけ（CA）

この段階では、重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習満足度アンケート、各学力調査や市販テストの結果分析を行った（資料⑮・⑯参照）。その結果、資料⑰のエ・クのように、研修の日常化や自己の授業力向上への意識化を図ることができたり、今後の課題を明確にしたりすることができた。

3学期には、授業実践をした各担任・専科・支援加配の教職員による、研修のまとめ報告会を行った。このことは、各々が研修してきたことの成果や今後の課題が示され、次年度の方向性が明らかになる上でも有効な研修であった。

教職員へのアンケートより 抜粋

回答者

A教諭（平成24年度赴任50代） B教諭（平成25年度赴任40代） C教諭（平成26年度赴任30代）

質問項目 8つ

ア 矢ヶ部小学校の主題研修の良い点

A：アットホームな感じで協力体制ができている。一人ひとりが真剣に研修にのぞんでいる。一言で言うと、全員で関わる授業づくりを行っている。

B：日々の授業実践に活かしていること。知らないこと、わからないこと、子どもがよくわかるための手立てや日常からできるひと工夫等、学ぶことが多い。

C：全員で研修に臨んでいること。

イ これまでの研修と違う点（特徴）

A：事前研に力を入れている（発問・板書）。授業整理会でそれぞれの立場で意見が述べられる。

B：ワークショップ型授業整理会により、職員の参画意識が高められている。

C：意見の交流がしやすい。

ウ 自分の研修に対する考え方・態度などで、変わった点。

A：自分が授業するとどうかという、自分の問題としてとらえる意識が強くなった。自分の考えを出せるようになり、他の先生方からもたくさん支援していただき意見がもられた。

B：本質的な内容を気軽に質問できる。他の先生の指導法を知り、日常の積み重ねがいかに大切かを学んだ。子どもへの言葉のかけ方も変わった。主体的に参加し、自分の意見が述べることができるようになってきた。

C：様々な観点から授業が見えるようになってきた。

エ 研修における改善点

A：授業力をもっとつけたい。公開授業で学んだことを自分のものにしていくこと。

B：研究主題を具体化したものを実際の授業でどう生かしていくか。

オ 研修をして、子どもたちの変容が見られたか。あれば、どんなことか。

A：話を聴くことができるようになってきた。

B：トライアングルトークで考えを出し合い、相手の考えを聞こうとする態度が見られるようになってきた。比較するとよく発表できるようになった。

カ 他の教職員との連携で行ったこと

A：研修での情報交換や意見交換。

B：どの先生の授業も、自分だったらこうする、という考えを提示できるように努力した。
悩みや苦勞をわかしあつた。

C：研修以外でもアドバイスがもらえる。

キ 研修の日常化が図られているか（授業研究を通して、普段の授業が変わったか）

A：T3：C7を意識している。考え、話し合う時間の設定をしている。

B：板書・比較活動を意識して授業するようになった。日頃からペアトーク・トライアングルトークを行っている。

C：日常の授業への意識が変わった。

ク その他（日常の授業で困っていること、課題だと思っていることなど）

A：一斉学習の時に、個人差があること。個に応じた手立てのくふう。

B：学力の差が大きく、もっと個別に指導したいがなかなかできない。T3：C7が日常的にできない。

C：板書の構造化、交流。

↑ 資料⑩ 教職員への校内研修に関する意識アンケート

6 成果と課題

(1) 研究の成果

- ① 【課題の共有化】(CA) からスタートし、【計画の共有化】(P) → 【実施】(D) → 【成果と課題の共有化】(CA) の各段階において、教務主任としての働きかけを行ったことで、マネジメントサイクルが循環し、めざす教職員の姿が見られるようになった。
- ② 担任の授業力向上とともに、児童の学力の伸びが見られた。

(2) 研究の課題

- ① 各教職員の課題が、キャリアステージや受け持っている学級の実態によって違うことを受け止め、個々の課題に対する改善策を共有化し、主題研修とともに校内研修の中に位置づけ、さらに組織的な教務運営を行っていくことが必要である。
- ② 国語科の研究を起点に、一般化し、他教科・多領域における日常の指導力向上に向けて、校内研修をさらに協働し、組織的にすすめていくことが必要である。

<参考文献>

- ・田村 知子 *et al.* (平成13年)「実践・カリキュラムマネジメント」 ぎょうせい
- ・文部科学省 (平成20年 8月)「小学校学習指導要領解説 総則編」 文部科学省
- ・福岡県教育センター (平成25年)「校内研修のすすめ方」 ぎょうせい
- ・独立行政法人教員研修センター (平成25年)「教員研修の手引き」
独立行政法人教員研修センター
- ・福岡県教育委員会 (平成22年度改訂)「活力ある学校運営の手引」
福岡県教育委員会 福岡県